

- ・ 行政とパートナーシップを築いた健康づくりを考える住民組織「え宴会」が活発に活動しており、地域の中で住民と行政が本音で協議できる場を継続的に確保している。
- ・ 住民の本音を引き出すことが行政の大きな役割であることを認識しているからこそ、この住民組織の活動が継続できていると考えられる。
- ・ 母子保健の分野においても、このグループの関与は大きく、干し柿作りをテーマにした世代間交流の楽しい場を設け、子育てについて話し合う機会として活用しているこの会の動きは、保健行政が補助金で行う事業とは異なって、住民の笑顔と主体性が感じられ、関わった行政マンが大きく刺激をされている。
- ・ 「え宴会」は、そもそも振興局の仕掛けで補助金からスタートしたものである。それまで、住民と話してどうなるのか思っていたが、やっているうちに定着してきたのは、互いにその位置づけを認め合ってきたからだ。
- ・ 「このままではいけない（これでええんかい）」の住民からの問題意識が、具体的な活動への原動力となった。
- ・ 「健康日本 21」の計画書はまだないが、「え宴会」でいつも話し合いをしながら考え取り組んでいるので、計画策定はあせっていないと担当者はコメントしている点からも、計画を作ることが目的化されていないことが良くわかる。。
- ・ ヘルスプロモーションの基盤作りの中で徐々に進めていくこととしており、大切にしていることは、会に参加した人が「良かった」と思ってくれる会にすることを一番大切にしている。計画書作りにつきあわせないことを肝に銘じている。
- ・ 会が楽しくなると、住民も行政も互いにその集まりを求めるようになるはずであり、くつろげ、思いが救われ、互いにエンパワメントされる関係を向上させることを目標においている。
- ・ お互いがわかりあえると互いのいいところを引き出せるようになり、自分たちでモーターを持って動けるようになる。そして発信できるようになる。地方分権化のメリットを出すためにも、総社市との合併の条件として、住民との話し合いの場を確保することを最重要課題だとしている。
- ・ サービスのあり方についても、行政サービスを利用しない人たちの意見を重視し、だれでも利用しやすいサービスに改善する。聞くことから始め、サービスを利用させることではないことを互いに理解しあっている。楽しくなければ、サービスじゃない。同じ方向を見ることが大切と住民も行政も同じことを強調する。

○「え宴会」の活動メンバーからのコメント

- ・ ユニホームを作成し、仲間意識やボランティア意識の高揚を図っている。
- ・ 何をして、楽しんでやっていくことを重視している。
- ・ 最初は恐る恐る、役目が終わることを期待していた。堅苦しい中で、テーマも硬く、面白みが見えなかった。段々雰囲気が変わってきた。
- ・ 行政側が構えなければ、住民が発言しやすい、自分たちが出しやすい場ができる。清音に住んでよかった。そんなまちにするにはどうしたらいいのか？を本音で話し合える

場を持つことを一番においている。ざっくばらんな話し合いの雰囲気、地域ぐるみの会を持つことを狙いとしていることが、互いに理解しあっていることがうかがえた。

○「え宴会」の集まりに参加を募る場合、以下の点を心がけている

- ・ 口コミで広げる。
- ・ 趣旨理解者を徐々に増やす。
- ・ 広報ではなく、自分たちで集める。
- ・ ええんかいの趣旨を対面式に伝える。
- ・ 男の料理教室など男の出番を作った。
- ・ 健康を目的にした事業ではなく、集まる場を確保した。みんなが集まりたくなるような場作り。エンパワメントしあえる環境。
- ・ 志ある人たち（ボランティア）の集まりを行政が支援。苦情を言い合う場ではなく、自分たちの街づくりを言い合う。自分の居場所の確保。
- ・ 男性の参加をもとめる・・・ピヤガーデンをいいチャンスに。

行政職員と住民との話し合いには、内容が時に厳しい課題や互いの意見の相違点の議論もあったが、笑顔が終始絶えず、互いを信頼し、本音で話し合っている雰囲気が良く伝わってきた。このような話し合いの場が、今後、住民自治のまちづくりの原動力となると痛感させられた。

分担研究報告書

次世代育成支援対策推進法に基づく地域行動計画と母子保健福祉の推進
に関する研修会 ―全国6カ所で行った研修会の評価に関する分析―

岩室 紳也（ヘルスプロモーション研究センター）

要 旨：次世代育成支援対策推進法に基づく地域行動計画の策定は各市町村にとって緊急かつ重要な課題である。しかし、地域保健福祉現場の多くは日常業務だけではなく、市町村合併やその他の各種計画策定・推進、等で多忙な中、「また計画づくり・・・」と受け止めているところも少なくない。さらに、健やか親子21の推進のために母子保健計画を策定、あるいは改定して間もない市町村では、次世代育成支援対策法に基づく地域行動計画と母子保健計画の整合性をどのように図ればいいのかについて混乱が見られている。われわれは地域行動計画策定が単に「国に指示されたから策定する計画」ではなく「真に意味のある地域行動計画」となるよう、「計画策定の目的を（再）確認するための研修会」を開催し、研修会の評価を行った。その結果、行政の現場では計画づくりの目的を確認する作業、研修が重要であることが明らかになった。

A. 緒 言

地域保健福祉の分野では健康日本21、健やか親子21をはじめとして様々な計画づくりが行われてきた。計画づくりを推進するため、近年多くの方法論が紹介され、実際の計画づくりに活かされている。そのような状況の中、市町村は次世代育成支援対策推進法に基づく地域行動計画（以下：地域行動計画）を策定することになった。しかし、市町村現場では母子保健計画を1年がかりでせっかく改定したばかりのところや、市町村合併に向けて多忙を極める中で新たな計画づくりに取り組まなければならないところが少なくない。また健康日本21の地域計画、地域福祉計画、等々、次から次へと計画づくりを求められる一方で、結局計画をつくっても状

況は変わらない、といった声も現場には少なくない。

健やか親子21を受け、従来の疾病早期発見型の母子保健事業から育児支援に重点を移した母子保健計画やエンゼルプランを策定した市町村では、いまさら同じような視点の次世代育成のための計画と言われても戸惑いを隠せないのは当然である。先進的に明確な目的意識をもって計画づくりに取り組んでいる市町村にとってはむしろ「国の発想のほうが遅れている」という思いがある。

一方で計画づくりについて明確の目的意識が持てない市町村では「また計画策定をしなければならない」という思いが強く、「計画書ができればいい」と発想してしまうことが考えられる。これは本来計画策定が何を目的

としているのかが理解されていないことが原因と思われた。われわれは母子保健計画と地域行動計画の整合性を整理する(スライド⑥)とともに、地域保健現場が前向きに地域行動計画策定に取り組めるようケースメソッド法に準じた目的確認型の研修を考案し、研修会参加者の気づきと評価について検討した。

B. 目的

全国6ブロックで、「計画策定の目的を(再)確認するための研修会」を開催し、「本来計画策定は何のために実施しているのか」を(再)確認するとともに、計画策定に対する意識、意欲を向上する上でこの方式での研修会の有用性について検討した。

C. 方法

1. 会場、開催日時、参加者数

時間はいずれも 10:00~16:00

ブロック	会場	日時	参加者数
北海道・東北	青森県	平成16年1月7日	130
関東	茨城県	平成16年2月17日	130
東海・北陸	静岡県	平成16年2月19日	80
近畿	滋賀県	平成16年1月19日	166
中四国	鳥取県	平成15年12月10日	130
九州	大分県	平成15年12月22日	166
合計	6会場		802

参加者の4割は児童福祉担当の事務職

2. 対象

市町村および県の母子保健担当者および児童福祉担当者

3. 研修会の流れ

10:00 開会およびオリエンテーション
 10:10 基調講演「次世代育成支援対策推進法と母子保健福祉の推進」

スライド①~⑥

10:40 研修の進め方

スライド⑦~⑧ (後半は使用せず)

11:00 ケース1 論点の抽出

11:30 論点に沿って、グループ討議

12:00 休憩

13:00 グループからの発表

13:20 コメンタリーレクチャー①

スライド⑨~⑬

13:50 ケース2 論点の抽出

14:00 論点に沿って、グループ討議

14:40 グループからの発表

15:00 休憩

15:10 コメンタリーレクチャー②

スライド⑭~⑱

15:50 先行自治体の紹介・質問討議

16:00 終了

スライド

基調講演、コメンタリーレクチャーで使用したスライドの一部を紹介するが、全スライドは下記のHPからダウンロードできる。

<http://homepage1.nifty.com/PRECEDE-PROCEED/> の

『1. 次世代育成地域行動計画について』をクリック

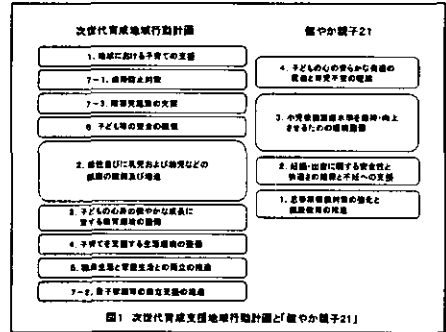
スライド①

(平成15年7月9日成立)

次世代育成支援対策推進法について

- 我が国における急速な少子化の進行等を踏まえ、次代の社会を担う子どもが健やかに生まれ、かつ、育成される環境を整備を図るため、次世代育成支援対策について、基本理念を定めるとともに、国による行動計画策定指針並びに地方公共団体及び事業主による行動計画の策定等の次世代育成支援対策を迅速かつ重点的に推進するために必要な措置を講ずる。

スライド⑥



スライド②

地域行動計画の基本的な視点

(行動計画策定指針)

- ①子どもの視点
- ②次世代の親を育むという視点
- ③サービス利用者の視点
- ④、社会全体による支援の視点
- ⑤全ての子どもと家族への支援の視点
- ⑥地域における社会資源の効果的な活用の視点
- ⑦サービスの質の視点
- ⑧地域特性の視点

スライド⑦

ケースメソッドとは？

- アメリカのハーバード大学経営大学院で1900年代の初頭に開発された教育手法。
- 実践能力を高める効果が優れていることから、欧米のいろいろな分野の大学院で、重要な教育方法となっている。
- ある状況の説明文(ケース)をもとに、その後どのように対応すればよいかを、当事者の立場にたって考えていくという教育方法である。
- 従来の講義形式の教育が、完成された知識の習得を目的としているのに対して、ケースメソッドは考える力をつけることを目的とする

スライド③

① 子どもの視点

- 子どもにとっての幸せとは何か？
病気の時に保育所に預けられるのは幸せか？
- 保育サービスの充実に伴い、親と子が一緒に過ごす時間が減ってしまうが…
就労環境を改善して、親子一緒に時間を増やすことを検討することも必要
- 親子の時間が減ることが避けられないなら…
親子一緒に時間を質の高いものにする支援も
- 計画策定プロセスに可能な限り子ども自身の参画も

スライド⑧

ケースメソッド「的」グループワーク

- 本来のケースメソッドは1事例につき、A4で10枚程度の詳細な情報を提供し、あらゆる要因を検討した上で、「特定解」を導き出す能力を養う。
- 比較的短時間で行うグループワークでは、そこまでは困難であり、簡単な状況設定の中で、どちらかといえば、「一般解」に近い解決策を得ることで、考える力を養うのが狙い

スライド④

② 次世代の親を育むという視点

- 思春期保健は「次世代の親を育む」という点では、きわめて重要ということになる
「食育」を切り口に学校保健との連携を推進
- 教科における保健学習との整合性に配慮
- 教育現場の努力を評価すること
ヘルスプロモーションも既に導入済み！

スライド⑨

計画の位置づけは？

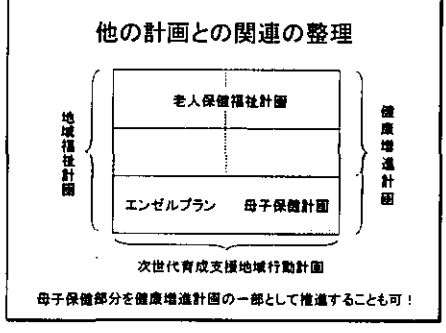
- 母子保健計画やエンゼルプランの法定計画
母子保健計画(平成8年5月 母子保健課長通知)
エンゼルプラン(平成7年6月 児童家庭局長通知)
- 平成15年9月1日付母子保健課事務連絡
地域行動計画は母子保健計画を包括する！
平成16年度末で、平成8年5月の母子保健課長通知を廃止する予定！

スライド⑤

市町村行動計画の内容(策定指針から)

- ①地域における子育ての支援
- ②母性ならびに乳児および幼児などの健康の確保および増進
- ③子どもの心身の健やかな成長に資する教育環境の整備
- ④子育てを支援する生活環境の整備
- ⑤職業生活と家庭生活との両立の推進
- ⑥子ども等の安全の確保
- ⑦要保護児童への対応などきめ細かな取り組みの推進
児童虐待防止対策の充実
母子家庭等の自立支援の推進
障害児施策の充実

スライド⑩



スライド⑫

児童と親の主体的な取り組みのために

- エンパワメント(内なる力の回復)がキーワード
- エンパワメントとは
自分や自分達の生活に影響を及ぼす問題を解決したり、コントロールする力を取り戻していくプロセス
- パワーレス状態とは？
コントロールする力や自信を失った状態
- 児童虐待は「パワーレス」状態の最たる例

スライド⑬

皆さんもパワーレスになってませんか？

- 予算やマンパワーの制約の中で、仕事ばかりが増えて、思うように力が発揮できない
- 次から次へと計画を策定させられるが、計画が有効に活用されていない。計画をつくるたびに、パワーレスに??
- 連携が思うようにできないこともパワーレスの原因だったりしますね！

スライド⑭

ニーズについての考え方について

- 各種の保育サービスの利用希望を尋ねることで子どもと親のニーズを把握できるでしょうか？
こうしたサービスを希望(利用)しない集団から虐待などの問題が発生している！
- そもそも、ニーズ調査は何のためでしょう？
現状を把握して、どのような取り組みが必要かを明らかにするためですね？

スライド⑮

どの取り組みが必要かは何をめざしているかで、異なります

現状がわかりましたが、どんな取り組みが必要？

スライド⑯

どの状態をめざすかによって、対策は異なります！

スライド⑰

「めざす姿」と現状とのギャップこそがニーズである！

スライド⑱

こうしたニーズ調査の利点

- 5年後に再度、実施することにより、めざす姿がどれくらい達成されたかを調べることで取り組みの評価ができる！
- 各種サービスの利用意向を尋ねるだけでは、取り組みの評価は困難！

ケース1

担当：課長、こんな通知が来ました。

課長：えー、また、計画を作るのか なになにに次世代育成支援対策推進法に基づく地域行動計画？一体、どんな計画なんだ？

担当：保育サービスの必要量をアンケートで調べて、出せばいいみたいです。計画策定は16年度で、ニーズ調査は15年度中にしなければならないみたいです。

課長：16年度に策定するの？ 市町村合併も控えているのに、こんな時期に計画を作れなんて、国も何考えているんだ。予算もつかないようだし、まあ適当に作ればいいよ。

保健師：課長～、母子保健課からこのような通知が来ました。次世代の地域行動計画の中に、母子保健計画の内容を盛り込まなければ、ならないみたいです。せっかく、母子保健計画を見直したばかりなのに、また、策定しなければならないのでしょうか？

課長：一体、どうなっているんだ、ちょっと、県の「子育て支援室」に聞いてみる(担当が子育て支援室に電話する)

担当：もしもし、〇〇町保健福祉課の△△ですが、今度の地域行動計画について、ちょっと聞きたいんですが、保健師が母子保健課からも通知が来たそうなんですが、

一体、どうすればいいのですか？

県の担当：母子保健課からの通知については、こちらでは把握していません。すみませんが、あの、先日の担当者会議で説明したとおりに、「策定の指針や手引き」通りに策定するようにしてください。

担当：課長、「策定の指針や手引き」通りに進めてくれということなんですが・・・

保健師：「策定の指針や手引き」って何のこと？

担当：ちょっとまって、「策定の指針と手引」はこれだ、これだ（書類の山から探し出す）。ニーズ調査のためのモデル調査票も出てるから、この通りにニーズ調査をやればいいですよ。

課長：ああ、そうしよう。

保健師の独り言（書類を見ながら・・・）

「策定にあたっての留意事項」には「エンゼルプランや母子保健計画を策定している市町村においては、現行のエンゼルプランや母子保健計画の推進状況の評価や推進に係る課題の分析を行い、その結果を活用していくことが必要」って書いてあるのに・・・

「さて、皆さん、今のやりとりを聞いて、どう思います？」

ケース2

課長：ニーズ調査の結果は出たか？

担当：ええ、この結果を見ると、延長保育や休日保育などの希望者が結構いますね。

課長：じゃあ、また、延長保育サービスを増やさなきゃならないね。

保健師：ちょっと、待って、夜間保育を親の希望に沿って、増やせばいい訳？ この前、テレビで、夜間保育を導入するかどうかで、もめている保育園の園長の話があったわよ。

担当：そのテレビ、僕も見たよ。夜間保育をやりたくないばかりに、保育園を建て替えるための補助金がもらえずにぼろぼろの保育園だったね。

課長：今の時代に、なんで、その園長は夜間保育をやりたくないのかね。

保健師：そこですよ。この園長が普通と違うところなんです。

課長：どうして？

保健師：その園長が言うには、「夜の9時まで、子どもをあずかったら、子どもは疲れ果てて、家に帰っても寝るだけで、親とふれあう時間も持てない」っていうんですよ。

担当：でも、遅くまで働いているお母さんにとっては、夜間保育は必要だよ。

保健師：私は園長の気持ちわかるな・・・
（そのとき、電話が鳴る）

担当：はい、保健福祉課△△です。（間をおいて）少しお待ちください。

保健師さん、母子保健推進員の〇〇さんから電話です。

〇〇：近所のお母さんで、昼間は子どもと二人っきりで、買い物にもあまり出ずに、閉じこもりがちな親子がいます。子どもあまり笑わなく、気になります。私も、保健センターや子育て支援センターに相談に行ったらと勧めたんだけど、「そんなサービスは利用したくない」って、断れたんですけど、保健師さん、一度、訪問していただけませんか？

保健師：わかりました。明日にでも、訪問してみます。いつも、ありがとうございます。
（電話を切る）

保健師：最近、サービスを受けたくないお母さんの中に、結構問題のあるお母さんがいるのよね

担当：えー、そんなの？ 保育サービスを希望しないお母さんの中にも、こんな問題があるんだ。

保健師：お母さん達の要望に応えることがニーズに応えることなのかな？ でも、さっきの電話みたいに、サービスを希望しないお母さん達にもニーズがあるような気がするし・・・一体、お母さん達のニーズって、何なんだろう？

課長：え〜、調査したのに、ニーズを把握できていないのか？

担当：アンケートだけじゃあ、ニーズを把握することはできないのかな？

保健師：やっぱり、お母さんの声を直に聞いてみないとだめじゃないの？

ナレーション：そこで、お母さんの声を聞いて

てみました。

担当：お母さん達の声聞いてみたら、保育についての要望もあったけど、職場に対する不満やお祖母ちゃん達と子育てについて意見が合わないとか、お父さんの帰りが遅いとか、たくさん意見を聞けたね。

保健師：ええ、他にも、安心して遊ばせられる公園がないとか、転勤してきて相談できる友達がいなくて、地域の人の目が気になって息抜きもできないとか、夜、急に悪くなった時に受診できる病院がないとか、いっぱい出たわね。

課長：これだけの問題を解決するのは、保健福祉課だけではとてもじゃないけど、できないよ。

「さて、皆さん、今のやりとりを聞いて、どう思います？」

4. 研修会の特徴

従来の研修は、計画策定の目的、具体的な方法論を伝達し、受け止めた受講生がそれらの情報を現場に持ち帰るといった内容のものであった。しかし、今回はケースメソッド法(スライド⑦⑧)に準じ、実際に現場で起こりうる想定される事例(ケース1, 2)をもとに、その後どのように対応すればよいかを当事者の立場にたって考えてグループ内で議論をした。(なお、「〇〇法」という手法を紹介すると、その手法を理解しようとするがあまり、一番重要なグループワークでのディスカッションができなくなることも想定されたため、後半の研修会からは「ケースメソッド的」と表現せずにグループワークを実施した。)

講義形式の教育は完成された知識を受講者に伝えることを目的としているのに対して、今回の研修は既に計画づくりについて一定の

情報を持ちつつ、現場で計画づくりを上手く進められない時にどのような対応が必要かを考える力をつけることを目的とした。

D. 結果および考察

1. 研修の結果

グループ討議の中で抽出された論点は、現場ならではの気づきが多かった。論点を全てカバーすれば計画策定のノウハウにつながっていた。論点は討議参加者にとっても有用だが、参加していない人にとっても計画づくりを進める上で参考になることばかりであった。計画づくりの研修を受けていない人が少なくない状況の中でこのような論点が抽出できるということは、方法論より目的確認が重要であると考えられたのでそのまま紹介する。

抽出された論点

●そもそも計画策定は何のため？

- こうした議論を職場ですべき
- 保健師の独り言でいいのか？
- 疑問を出していけない職場の雰囲気
- 何のために作るのかという話し合いがない
- コミュニケーション不足
- 計画のことがわかっていない
- 計画策定の意義が理解できていない
- 計画策定自体が目的になっている
- 策定手法だけが先行している
- 手引きどおりでは特性が活かせない
- 多くの人の意見を入れて策定すべき
- 計画策定を目的ではなく「手段」に
- 策定が義務付けられたことをチャンスにしよう
- 連携や地域づくりの手段にしよう
- 策定するプロセスそのものを大切にしたい
- 国や県のために計画を作るのではない
- 総合的な計画の策定が必要
- 自分の町の特性を把握できるチャンス
- 市町村の主体性を発揮して策定を
- 「魂」のある計画を策定しよう
- 自分のまちの課題は何なのか？
- 計画が本当に必要なのか？
- 計画づくりはまちづくり
- 母子保健計画やエンゼルプランの一貫性、整合

性が考えられていない
今までのやり方ではなく総合的な計画にしたい
各部署の意見を聴いて取り入れたい
自分たちの仕事を計画に盛り込むチャンス
事業の裏づけにしよう

●地域行動計画策定は何のため？

少子化対策として箱物など受け皿を整備したが
成果が上がらなかった

少子化対策が個々の計画では成果が乏しかった
安心して、生み育てられる地域づくりのため
虐待の問題もあるが・・・

子育て支援と少子化対策は別に考えるべき！

子育てを支援できる地域社会をつくる

対象は地域全体である

誰のための計画策定か？

親が安心して生み育てられる

子どもも健やかに育つ

それで親が幸せになる

「子育てが安心できる」とはどういう状態？

子どもが病気のときに安心して休める

相談できる人がいる

安心して遊ばせる場所がある

かかりつけ医が身近にいる

父親が育児に参加する

子どもの視点での計画を策定することが大切

事業所も巻き込んで子どもを育てやすい環境を
どんな子どもに育てて欲しいのか？

どんな子育てができたらいいのか？

そのための条件を一緒に考える

子どもが親に愛情を持って育てられる

親が自信をもって子育てができる環境づくり

親の生活優先の視点が多いのが現状

出産により仕事をやめなければならない現状

そんな母親をいかに支えるか？

子どもの犯罪も母親の不安を増長

子育てママのため交流の場づくり

赤ん坊から小学校高学年までの育成環境づくり

子どもの居場所づくり、専業主婦への支援

個人、家庭、地域が次世代育成を一緒に考えて
いく機会である

自分も他の家族への子育て支援をしている？

隣近所ですこうした子育て支援ができる

そのための行政の役割が必要

この町に生まれて良かったと思えるまちづくり

いずれ、この町に戻って来たいと思える町へ

新しい事業を考えるのではなく・・・

既存の事業を見直していくことが大切

理想の子育てを押し付けていいのか？

専門家だけが考えないことが大切

専門家の思いと住民の思いのずれ

住民の声の背景にあるものを考えよう

休日保育や夜間保育がなぜ必要か？

親をエンパワーすることが必要

育児保険が検討される中で、公的責任としての
母子保健についての検討が必要

母子保健計画と地域行動計画

母子保健計画を見直したばかりなのに・・・

母子保健計画との相違点が不明

見直したばかりの計画策定の意義は？

●住民の参画

トップダウンの計画からボトムアップの計画へ

住民がどう生きたいと考えているかを大切に

今までの計画がうまくないのはなぜ？

住民が満足していない

住民が何を望んでいるのか？

住民自身も何ができるかを考えることが大切

過去の策定できなかったプロセスに力を入れる

今回は住民の声を聞く機会にしたい

前回、住民と一緒に策定したところは、他課を

さらに巻き込んで策定したい

住民との懇談で出てくる住民の要請

これはできないという勇気も必要

できないことを住民と一緒に考えよう

地域住民と実践できるような計画策定を作ろう

住民と一緒にまちづくりを進めることが大切

住民にサービスを提供するだけでなく・・・

住民が元気になるような計画策定を

住民のワーキングチームの必要性

市長にもその大切さを知ってもらおう

予算もないので知恵を絞って住民も巻き込んで

行政の現状や限界についても知ってもらおう

こうした中で何が必要かを考えてもらおう

→ これが住民の参画なのだ気づいた！

住民にも地域行動計画について周知しよう

計画があつてよかったと住民と行政が思える

地域行動計画を推進するのは誰か？

半分は行政だが、半分は地域住民である！

住民のエンパワーが必要

住民参加ですみたいまちづくりを考えるため！

住民の意見を聴いた計画策定が少なかった

住民が主体となって地域づくりをするため

住民と一緒に推進することが大切

行政主体ではサービスも限られる

住民と一緒にサービスづくりを

サービスの必要性も住民と一緒に吟味を

本来、ニーズを把握する段階で住民との対話を

ニーズ調査から既に、計画策定は始まっている

●計画策定における連携

国の文書を流すだけでなく

少子化対策には総合的な計画が必要

計画策定についての情報が共有されていない

計画策定についての情報の提供の仕方に工夫を

県も市町村も横の連携ができていない

県の担当も母子保健課の通知を把握していない

各部署から参画して計画策定を

通知がそれぞれ縦割りでできている
保健・福祉・教育・労働を巻き込むのに通知を縦割りでではなく、関係機関と協働で関わる協働や連携が必要だと認識しているが
計画策定をこうした連携のきっかけに
全庁的な取り組みにする 縦割りから横割りへ
空間的に離れた部署だと連携が難しいが・・・
子育てに関わるそれぞれの領域が考え方（視点）や課題、社会資源を共有して支援を縦割りになっているのを、どう連携していくか？

保育園や幼稚園とも連携して
法律に明記されたことを良い契機にしよう
計画策定を連携推進のきっかけにしよう
それぞれの役割も明確にしよう
誰がリーダーシップを発揮するのか？
主管課の課長や首長への働きかけ
母子保健計画と児童福祉の共通点は？
担当レベルでもわからないと住民も？？
母子保健担当が把握していない
課内で学習や協議の機会がない
担当者会議後の課内の共有もない
会議の復命が不十分
課の中で周知されていない
少子化対策推進本部はあるが・・・
実際は機能していなかった
今回の計画策定では、企画が音頭とったが、その後はかなり引いている
児童福祉にお任せ

商工労働部の積極的な関わりも必要
職場環境や教育が少子化対策には重要
サービスの利用について連携を
バラバラな子育て支援から一貫性のある支援へ
従来の縦割りでは進まない計画策定
従来の枠組みでは解決しない問題が多い
従来のスタンスでは解決できない
→ 今日のようなディスカッションが大切
ニーズ調査により課題が見えてきたら・・・
組織間の風通しが良くなる
思春期保健で学校との連携に取り組もう
親教育も盛り込んで行きたい
計画書よりもプロセスが大切
関係者と一緒に検討することが大切
それぞれの課題を共有し取り組み方を検討
母子保健活動について知ってもらう機会

●市町村合併前に計画策定をする意義

市町村合併前の保健計画策定
再策定が必要になるので、気が乗らない
新しい自治体でも策定することは無駄？
合併があっても計画策定の目的は変わらない
地域の特性はどう活かされるのか？
合併予定の市町村で、協働のニーズ調査
合併直前に策定するのは住民の取り組みの為！
計画を見直すことにより実効性がより高くなる

5年間見直さずにすむ計画は「良い計画」か？
合併する市町村の特性を明らかにする
合併協議会との調整

事業のすりあわせと計画策定の連動
職員間のつながりを強化

← 計画策定を通して
同じアンケート調査により地域特性もわかる
町をどうしていくのかを企画サイドと一緒に
担当者が現状を直視し、評価する機会
合併する予定の他の自治体の計画を見ながら
見直しを

●地域行動計画策定におけるニーズとは？

国のニーズ調査は計画作りとは別物に感じる
住民のニーズと行政マンのニーズは違う
国のモデル調査票では不十分である

ボリュームは多いが・・・
行政は住民からあまり言われたくない？
本当の気持ちを語らせないようにしている？
ニーズ調査は現状把握である！

調査結果を市町村ごとに分析
→ 優先順位を明らかにできることが大切
財政面まで盛り込まれることが大切

住民がどこまで負担できるのかも尋ねる
要望を聞くだけでは、絵に描いた餅になる
誰にとってのニーズ？

働く親のためのニーズか？
子どもの視点か、親の視点、地域住民の視点か？
どの視点でのニーズかを議論することが必要

働いていない母親のニーズにも注目して
ひきこもりがちな母親のニーズをどう聞く？
親と子どものニーズのギャップをどう埋めるか

子どもがどうしたいかが大切
親子で一緒に過ごせるためニーズ
親子の関係が深まるためのニーズ
親を育てるという視点のニーズも大切
親の責任についての再認識

一緒に学習の機会が必要！
親のわがままを聞いても・・・
親がどんな気持ちで子育てをしたいのか？

親の自己肯定感を高めることもニーズに
父ちゃんと母ちゃんが楽しくしていないと、子どもは結婚したいと思わない

両親の自己実現ができるためのニーズも重要
社会的ニーズとは母は意識していないが周囲が意識、認識しているニーズ。

知識がないことを本人が表出しにくい。
いっぱい先が見えない親のニーズ

妊婦にも調査をすべき
色々な立場の人の意見も必要
中高生にもニーズを聞いてみよう

調査票をつくる段階で、親に関わってもらおう
祖父母、雇用主、地域の住民にも聞こう
職域、地域、家庭のニーズ、そのための役割

安心して子どもを生き育てていくには？
母親の役割を軽減 子育てメイトなど
職場におけるニーズ
子どもが病気のときに休める
住宅などの環境
長い目で地域全体のニーズを捉えることが大切
10年後どうあったらいいか
ニーズ調査で住民が期待をしてしまうのでは？
ニーズ調査の中に自由意見を書く欄をつくらう
自由記載の中から「光る言葉」を見つけよう
調査を利用して、こちらの思いを伝えることも
不必要と思われるサービスの要望を聞くより
アンケートではサービスへの依存が増す
子どものニーズをどう把握するのか？
「あなたが子どものときはどう思ったか？」
子どもの要望
夜間保育は子どもにとって？
足りない環境にも子どもが順応してしまう。
潜在化したニーズを把握している人がある
顕在化しているニーズ、潜在化しているニーズ
顕在化しているニーズはアンケートでわかる
仮説になっているニーズは把握できる
潜在化しているニーズは聞き取りが必要
子どもに関わる機関から意見を聞くことも
子育てを楽しんでいない親が増えている
こうした部分は親が気づいていないので・・・
子育てのあるべき姿に近づくために必要なもの
それをお互いの話し合いの中で明らかに
めざす姿に向かって、どんなニーズがあるのか
住民がこの町に住んで幸せだと思えるために
子どもがどう育ったらいいのかを議論
サービスに対する要望がニーズなのか？
行政がやらなくても地域でできることがある
中学校区単位で集まってディスカッションを
眠っている地域の箱物やマンパワーも活用
自分の町で何が大切なのか優先順位を考えよう
いまの制度、サービスの良い点も把握しては
地域の「強み」を活かそう
数値に出てこない住民の要望も上げよう
質の部分も大切にしたい
他の計画を見直しする際にも、子育て支援の視
点で、話し合うこともできるのではないかな？
今ある事業をどう活用するか？
こうした視点でのニーズも重要

●ニーズ把握・アンケート調査
アンケートのメリット
答えを想定、定量化できる
アンケートではハード面しかわからない
ソフト的なものをどう把握するのか？
経済的支援の要望がアンケートでは多かった。
なぜそれが必要と思っているかを確認しよう
ハード面や体制についての調査項目以外にも必要
調査票からは多様なニーズはわからない

少数派の意見も大切にしたい
アンケート未回答者に声をかけても出てこない
調査票は業者が作成したものが多く、自分の
町にはないサービスも選択肢になっていたりす
るし、自分の町らしさがでない
アンケートで多数意見がニーズか？
少数意見をどう反映させるか？
アンケートで実情を反映できるのか？
利用していないくせに、必要に「〇」
子育て中の人から、アンケートに協力する気が
なくなるという声も
アンケートと聞き取り調査を組み合わせる
聞き取りのメリット：想定しない要望も出る
満足度などは生の声を聴くことが大切
要望は多いが・・・アンバランスな要求もある
日常の業務から把握できるはず
お母さんの生の声を聴こう
インタビュー様々な機会を利用して
健診を受診した母親からも雑談から
訪問指導などでの聞き取り
健康診査の問診などから
PTAなどの機会を活用して聞き取りも
役場の他の課を訪れた住民への聞き取り
窓口にカードを置き子育てしやすい町の
ために何が必要かを聞こう
児童民生委員や母子保健推進員などにも
地域の行事などに参加して声を聴いてみよう
モデル調査票は行政が提供できるサービスのみ
住民の要望を聞くだけでいいのかな？
声に出ていないニーズをどう把握するのか？
潜在化したニーズも把握したい
こうしたニーズを地域で共有しよう
ライフサイクルによってニーズも異なる
父親の意見も祖父母の世代などの意見も聞こう
モデル調査票では限られたニーズ把握だけ
子育てに何が必要なのかを把握すべき
数値だけでは把握できない
その裏にあるものを把握することが必要
住民とのキャッチボールで「生のニーズ」把握
仕事を持つ母親、専業主婦、障害児を持つ親
一人親、他人とうまく関われない親もいる
どんな親も不安なく子育てできるような支援を
住民、地域でできることも内容に入れる
次世代育成をテーマに住民と一緒に語る会を
調査そのものが住民へのPR
意見交換の機会を作る
同じことを考えていたという気づき
誰が何をすればいいかがわかってくる
公務員も地域に戻れば、資源のひとつ
皆が役割を持っていることに気づくこと
自由記載で書いてもらうことも必要
小児医療についてのアンケートなど
「わがまま」インタビュー

今ないサービスを創設するための質問
わがままと思われずに受け入れられることも
何のためのアンケート調査かを話し合おう

●日常活動でのモニタリング

住民の声を聴くことが大切
健診の際の保健師との面接を活用
乳児相談や健診、家庭訪問でのお母さんの声
日頃の活動で保健師が感じていることも
ケースの中から把握することも大切
虐待ケースに関わるスタッフから聞く
保育士さんから子どもが何を感じているか
現場のスタッフが意識して母親の声を
グループインタビューなどで生の声を把握
親がどのような子育てをしたいのか？
どのような状況なら、子どもを生めるのか？
子どももどう育てて行きたいのか？

●関係機関・団体と協働で

行政だけでニーズを把握するのは困難
児童民生委員、子育て自主グループ
母子保健推進員
データを持っている保健所の役割も
学校と連携して、子どもたちの意見を集約
雇用主の意見をどう聞くか
ベビー用品関連の企業から聞くことも
小規模事業所のことを考えて商工会にも調査を
育児サークルの際に耳を傾けると意見を聞ける
母子保健推進員などの住民組織から情報
行政だけの情報では不足
行動計画は色々な人がはいることが大切
それぞれが持っている情報を共有しよう
自助、互助、公助、民間のサービスの活用も

●ニーズ・ウオantz・ディマンド

親の要望がニーズか？ ニーズと要望の違い
要望はしないが、必要な支援もあるはず
親自身が力をつけることも考えることが必要
相手が望んでいなくても必要なニーズがある
子どもにとってのニーズは？
子どもはサービスを選べない！
隠れているニーズをどう把握するのか？
アンケートなどでは、表出されないニーズ
対症療法のニーズだけでなく、真のニーズも
保育サービスの充実は対症療法
子どもの視点でのニーズが大切
ニーズは「必要性」誰が感じる必要性なのか？
潜在化しているニーズもあれば
顕在化していてもやらなくていいサービスも
要望（ウオantz）が出てくる背景に何がある？
保育サービスを希望する理由は？
子育てが嫌？
仕事のため？
長い目で見て必要なサービスなのか？
こうした対話も住民とできたら良い
子育てサポート制度 ←母親のニーズ？

始めたら、利用者は少なかった！
母親のニーズに合っていないなかった？
サービスに乗ってこない人をどうするのか？

●こんな意見も

児童福祉担当者は住民との交流がない
保健師との感覚のずれが生まれてくる
保健師と一緒に計画策定をすること

●参加者の感想・評価

研修を受けるまでは、計画を策定することが目的になっていました。何のための計画なのかを考えつつ、保健師さん・関係部署と連携を図りつつ計画を策定できればと思います。
計画を作りましょうという説明会的研修会かと思ってきましたが、新しい形の研修で、何故計画が必要なのか、ニーズとは何か、基本をグループで議論できたこと、しかも保健と福祉の人が一緒になって議論できたことがとてもよかったですと思います。

「行政がしていたことは本来住民がみんなですべてしていたことである」という言葉が印象的でした。自分が“この町で子どもを生み育てたいと思えるまちづくり”を、住民みんなですべてやっていたら・・・と再確認した。

計画書づくりを何回か実施してきたが、“仕事”でつくると意識が強く、自分自身“一住民”の視点が抜けていた気がする。
エンゼルプランも母子保健計画も次世代もすべて住民のための計画であることに変わりはないので連携をうまくして変化させていきたい。
計画づくりの具体的な入口がよく見える研修であった。

今回の研修でようやく、胸の中にあったツツツとした感覚が解消されました。

まだ“絵に描いた餅”のような思いが抜けません。我々行政職のニーズは計画を策定し、住民からの反応や喜びの声を聞くことですが、それを満たすためには日々の業務整理、上司の理解、自分の能力向上など問題が山積みです。

国が言うので仕方なく策定するという考えで参加しましたが、大きな人的・金銭的コストをかける計画策定であるからには、実りあるものにならなければならない思いを抱いて研修終了しました。勉強になりました。ただ、管内の市町村のトーンの低さ、現場・県ともに激務で、目の前の事務をこなすことで身も心もいっぱいという状況。理想と現実とのギャップが・・・

計画策定の意味はわかりましたが、自分の中では「市町村担当者を苦しめる」「一定の業者を儲けさせる」無駄な計画作りとしか思ってません。コミュニケーションが取れない同じ課の人と、頑張ってこの仕事を続けようと思える意欲がわきました。

児相から来ました。保健師さんたちとの連携(お

世話になっている)は普段から大切にしているのですが・・・こういうディスカッションは有効と感じました。元気になった!!

エンパワメント・・・自分自身が一番必要かもしれないですね。

研修会に参加してエンパワーされましたが、業務の中ではパワーレスの方向に動くのではと不安があります。

こういった研修会に参加すると、計画づくりの意義をひしひしと感じます。「私がやります!」の音頭をとりたい気持ちも少し生まれるのですが、明日の休みを経て、明後日の仕事にのぞんだ時に、現実の業務(事業のオンパレード)を目の当たりにして沈んでしまうのだらうと思ってしまいます。

県の立場として言いにくい部分まで、具体的にサジェスションしていただけたと思います。

講演よりグループ討議の方が一人一人の意見が聞け、また、思っている事をストレートに言え、有意義な研修だった。

こういう形の研修会は初めてで最初とまどいしましたが、大変おもしろく為になりました。

ニーズについての整理ができたことはとてもよかった。

少子化に伴う対策と思うが、「産めよ増やせよ!!」と前世紀の時代にもどってしまうのかな?(本音として)

自分の夢を描くことが、いい仕事・そしてよい町づくりの条件かなと改めて感じた。

自助・互助・公助のあり方を、公的扶助に携わる行政マンはもっと勉強すべきだし、勉強の機会を提供されるべきである。個々それぞれ考え方・基準に大きな差があるが、多様性という意味ではともかく、疑問符?の方も多々いる。依存の構造を強くしている。

研修(事例)は、役場そのものでした。研修をして、考え方等変わりました。

今さらニーズとはときかかれても うーん・・・。

具体的な行動計画作成の説明や、先行自治体の体験談及び、その策定における留意事項の説明があると期待していたが、期待はずれだった。県や、国も先行自治体の情報をどんどん提供していくべきなのでは。何のための先行自治体で補助金を使っているかわからない。

ケースメソッド 2 事例についての研修では、テーマの絞り方が難しく、話をすすめるのに時間がかかってしまいました。ケースメソッドは 1 事例でよかったのではないのでしょうか?

もう少し次世代の内容についてゆっくりと、つっこんだ内容まで話していただきたいかったです(モデル町村での取り組み状況など)

次世代育成に対し、改めて児童福祉担当者だけでは無理があると感じた。

今日は、地域行動計画の策定法や、県の役割等の話であるのかと思ってきましたが、グループワークを通して、住民主体・理念の大切さを再確認できました。

わかっているつもりで、自分の中で形骸化していたと気づきました。

2. 研修全般の評価

従来、計画づくりに関する研修会は講義形式による How To ものやトップダウンの講義形式が多かったと思われる。しかし、これらの方式だと計画づくりの方法は理解できても、計画づくりが本当に必要なのか、計画づくりの目的は何かといった重要なポイントは納得できていなかった。今回講義時間を短縮し、グループワークとその発表に時間を多く割いたことで、すでに一定の「理解」を得ていた「計画づくりの目的」についてさらなる「納得」が得られたと思われた。

3. 寸劇の有用性

寸劇という手法は一見幼稚で、大人に対する手法として反論が出るのが想定されていた。しかし、業務多忙な中で「予算も付けずにまた計画づくり」という不満や「母子保健計画を策定したばかりなのにまたほとんど同じ対象を意識した計画をつくらせるのか」と「日頃から矛盾と感じていること」を無意識ではなく、意識した上で「やはり計画づくりは重要である」という、ある意味でブレイクスルー的な意識改革を促すには、まずは(事務職、専門職を含めた)当事者の共感を得ることが重要である。この意味では、寸劇という手法は一定の効果があったと思われる。

寸劇自体は当研究班のメンバーが役を演

じたため、「演じる」という点では準備不足であったと反省される。しかし、日頃矛盾を感じている部分を寸劇というわかりやすい手法で、かつそのことを母子保健関係の研究班員が演じることで現場の本音を代弁していたことも、気づきを促せたと思われる。

4. 気づきのプロセス

今回の研修では、次のようなプロセスで参加者が自らの不満や疑問に気づき、最終的には計画の重要性や計画に取り組む姿勢、計画策定の方法論にいたるまで様々な気づきを得ていたと思われる。

気づきのプロセス

①自らの現状の不満の確認

②目的、原点の振り返り

「何故、計画が必要か」

「何のための事業か」

「そもそもニーズとは何か」

③目的を実現するための計画策定とは

このようなプロセスで計画に関する考え方が変化していることは、今後各種計画の策定を関係機関に求めるに当たって、国（や県）が原点に立ち返って「何故、計画策定が重要か」を確認する作業が必要であると思われた。

5. グループワークの効果

研修会という講義式のものが想定されることが多いが、近年、様々な研修でグループワークという手法が用いられている。最新の知見、情報を得るためには講義式のものが有用であることは間違いない。しかし、一方で情報（Information）だけがあってもその情

報に関する教育（Education）をどんなに充実させても対話・関係性（Communication）が築けなければ得られた情報や受けた教育を自らの糧とすることが難しいということも明らかになっている。計画づくりについては既に多くの著作も出版され、一定の情報は伝わっている。しかし、その情報や教育（研修）を活かすには職場内の関係者とのコミュニケーションが重要である。今回、グループワークを通して計画策定における問題点（論点）を抽出し、グループ内で解決法を議論した後にそれらの考え方を研修参加者全体で共有するという研修手法は、今後の計画策定の現場でも一定の効果を発揮すると期待される。

E. 結 語

地域保健福祉の現場は様々な形で計画づくりを経験している一方で、計画づくりの目的や方法について必ずしも適切な理解や効果的な実践ができていない。今回の「計画策定の目的を（再）確認するために事例から論点を抽出し、お互いが確認する方法」は行政職員が計画づくりに向けてやる気を起こす上で一定の効果があることが示唆された。

【文 献】

1) 石井敏弘，櫃本真津編：ケースメソッドで学ぶ ヘルスプロモーションの政策開発，ライフ・サイエンス・センター，2001，横浜